

真夏の犬

宮本輝





文春文庫

真夏の犬

定価はカバーに
表示してあります

1993年4月10日 第1刷

著者 宮本 輝

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-734809-8

早文庫

真夏の犬

宮本 輝



秋香堂

目次

真夏の犬 7

暑い道 33

駅 57

ホット・コーラ 77

階段 101

力道山の弟 123

チョコレートを盗め 149

赤ん坊はいつ来るか 175

香炉 199

あとがき 225

解説 饗庭孝男 227

真夏の犬

真夏の犬

ぼくの住んでいるところから、歩いて十五分ばかり北へ行くと、その年の夏、日本人で初めて、ヨットで太平洋を横断した青年の実家があった。その話題で日本中が大騒ぎをしていたので、ぼくの友だちも、その英雄の家と両親をひと目見ようと、しょっちゅう誘いに来たが、ぼくは行けなかった。

それまで、雀^{ジャンゾウ}荘に入りびたっているか、もしくは一週間も二週間も行方をくらまして、家に帰ってこなかった父が、突然、大金を持って帰って来、これから毎月、この倍近い収入があるのだと、幾分昂揚した口調で言ったあと、ぼくにその仕事を手伝うよう命じたからだ。

だから、その年、中学二年生のぼくは、夏休みの後半すべてを、大阪の北西部に位置する工場街の、そこだけ閑散と静まり返って、近辺に滅多に人の姿の見られない、だだっ広い空地で、朝早くから日が暮れるまですごすはめになった。

父が、高額の定収入を得る仕事を思いついたのは、行きつけの雀荘の主人の何気ない

ひとことからだったそうだ。雀荘の主人には、腹違いの弟がいて、その男は大阪中古車部品組合の世話役だった。組合に加盟している中古車部品屋たちは、仕入れてきた廃車の置き場所に困っている。土地はだんだん高くなるし、中古車部品の業界はジリ貧傾向で、廃車を積みあげるための土地を持つ余裕はない。雀荘の主人は、そんなことを常連客の誰かに話したあと、

「あいつらも、所詮、小商人こあきんどやから、組合の使い方を知りよれへん」

と言った。父は、その組合の理事の中に、昔の知人がいることを思い出したが、同時に名案も思いついたのだった。組合で金を出し合って、どこか空いている土地を借り、そこに各々が仕入れてきた廃車を置けばいいではないかと。

ぼくは、父がどうやって千五百坪の空地を大阪市内で捜し出し、その持ち主とどんな契約を結び、いかなる交渉の末に、組合の意見をまとめて金を出させることに成功したのかは知らない。だが、放蕩で山師みたいな性分の夫の、何度も事業を旗上げしてはつぶし、そのたびに借金取りに追われるという生活に疲れ果て、長く定収入のないことで憔悴しょうすいしていた母が、まるで天から降ってきたかのような商売と、それによる大金のほとんどを手渡された際の表情は、ぼくまでを歓びのあまり、アパートの部屋の隅で、でんぐり返りをさせたほどだった。

母は、そんなぼくを微笑みながら見やり、大金を胸に抱いて、

「お父ちゃんは、やっぱり、いざとなったら頼りになる人やなア」と震える声で言った。

ぼくに与えられた仕事は、朝の七時から夜の七時まで、その廃車置き場に坐っていることである。タイヤや、まだ使える部品を盗まれないように見張っていればいいのだった。

ぼくは、近所に住む青年が、ひとりでヨットに乗って太平洋の横断に成功した三日後、つまり昭和三十七年八月十五日に、福島西通りから市電に乗り、千鳥橋へと向かった。ナップ・ザックの中には、麦茶と、母が作ってくれた弁当、それにトランジスタラジオが入っていた。夏休みの残りを、仕事の手伝いで費やす代償として、前日の夜、父が日本橋の電機店で買ってくれたのである。

千鳥橋で市電から降りると、ぼくは父が書いてくれた地図を頼りに、海とは反対側への道を歩いて行った。市電の停留所の前に、小さな商店街があったが、メタンガスのあぶくが湧くドブ川に架かった橋のところまで来ると、もうそこは小規模な工場が密集する地帯だった。

ぼくは橋を渡って右に曲がり、ドブ川に沿った道を進んだ。あちこちに、工場の煙突が見えるのに、そしてそろそろ出勤の時間なのに、ぼくの視界には、行けども行けども人間の姿は映らなかった。あるのは、臭い川と工場と、錆びた有刺鉄線で囲まれた空地

と、そこに群生する雑草だけである。

やがて、〈山川物産〉とペンキで書かれた倉庫の壁が見えた。倉庫は三軒並んでいて、その手前の広い空地には、すでにきのう運ばれて来た廃車が四、五十台置かれてあった。車が通れるだけの幅にわたって、有刺鉄線は切断され、丸められて、フロントガラスのないシボレーの屋根に載せてあった。ぼくは、廃車の並ぶ空地の真ん中で立ち停まり、日陰を捜した。一台の、とりわけ大きなダンプカーは、廃車ではあったが、ほとんど原形のままで、空地に敷かれた穴ぼこだらけのコンクリートに菱形の影を落としていた。ぼくは、そのダンプカーの周りを居場所に定め、麦茶の入っている水筒と弁当箱を出し、ナップ・ザックを敷いて、そこに腰を降ろした。

ぼくは、たった三十分のあいだに、何度時計に目をやったことだろう。三十分という時間が、どれほど長いかに感心し、このまま夜の七時まで見張りつづけることに、退屈を通り越して、ある種の恐怖を抱いたほどだった。

ダンプカーの周りの影は、太陽と一緒に動いた。ぼくは、ダンプカーの周りを、時計の針と同じ方向に、少しずつ移動しなければならなかった。あんなにも欲しかったトランジスタラジオを買ってもらったというのに、ぼくが、そこから聞こえてくる声や音楽に心を傾けなかったのは、想像以上の暑さのせいもあったが、たとえば廃車にせよ何十台

もの車があり、倉庫があり、見渡せば工場の建物が見えていながら、あたりに人の気配が微塵も感じられなかったからである。

動きを停めたかのような時間と、うだるような暑さと、必ず近くにいるはずの人間の気配が遮断された場所に何もせず坐りつづけていることは、たった二時間のあいだに、麦茶の入った水筒を空に^{から}させた。

ぼくは、最後の一滴を舌に垂らすと、廃車置き場から川沿いの道に出、市電の停留所まで小走りで行った。薄暗い商店街にある食堂に入り、かき氷を注文して、年老いた主人の目を盗み、大きなやかんから水筒に麦茶を移した。時間をかけて、かき氷を食べ、食堂のコップで麦茶を何杯も飲み、廃車置き場に戻った。その時点で、時計の針は、やっと十時をさしていた。

昼になると、影は、ダンプカーの下にしか見当たらなくなった。仕方なく、ぼくはダンプカーの下にもぐり込んで、弁当箱をあけた。グリース油や重油の匂いが頭上にあつた。工場のサイレンを遠くに聞きながら、ぼくは弁当を食べた。そうしているうちに、この相当な年代物のダンプカーは、シャフトやスプリングのことごとくが腐っているのではあるまいかと考え始め、いまにもシャシーが折れて、下にいるぼくをぐしゃぐしゃにつぶしてしまいそうな気がしてきたのだった。

しかし、そんなぼくの不安をかき消したのは、弁当の匂いに誘われて、どこかから集

まって来た六匹の野良犬たちである。

犬たちは、長く垂らした舌の上に泡を載せ、低い唸り声を立てて、ダンプカーの周りを取り囲み、ときおり威嚇するかのようになり、背中の毛を逆立てた。ぼくは、残っていた玉子焼きふたきれと焼いた鱈子たらこを遠くへ投げた。野良犬たちが一斉にそこへ群らがつた隙に、水筒とトランジスタラジオをつかんでダンプカーの下から這い出て、そのまま市電の停留所まで走り、アパートに逃げ帰ったのである。

その夜、ぼくは、もうあそこには行きたくないと父に言った。狂犬病の犬が十匹もいた、と。

「あほんだら！ それでもお前は男か。何のためにチンポの毛が生えてきたんや」

父はそう怒鳴って、九月になれば、バラック小屋を建て、守衛を雇う予定だが、それまでは、お前に手伝ってもらうしかないのだと、ふいにさとすようにつけくわえた。ぼくは、部屋の隅で膝をかかえ、

「どこにも逃げるところがあらへんねん。車の中に入ったら、暑さでミイラになってしまふでエ。あしたになったら、もつと、ぎょうさんの野良犬が来よる。みんな狂犬病にかかってんねん。噛まれたら、ぼくも狂犬病になるやんか」

と半泣きになって訴えた。すると父は、どこかに出かけるためにドアを開きかけ、

「あそこには野良犬はいてるけど、俺が見た野良犬の中に、狂犬病にかかってるのは一

匹もおらへんかった」

そう言い残して、扇子で胸のあたりをあおぎながら出て行った。それまで無言でいた母が、食卓の上を片づけてから、

「あした、お母ちゃんの日傘を持って行き。そのダンプカーの荷台に乗ってたら、野良犬が来ても安全やろ？」

と言った。ぼくは、母に背を向けて横たわり、

「どんなに暑いか、お母ちゃんは知らんや。日傘なんか、何の役にもたてへんわ」

そうつぶやいて、壁を蹴った。ぼくも母も、てっきり雀荘に行ったとばかり思っていたのだが、父は一時間もたたないうちに帰って来て、油紙に包まれたパチンコをぼくに投げてよこした。それは、小学生のころに、おもちゃ屋で売っていたような、ちゃちなパチンコではなく、金具もゴムも頑丈で、相当な威力がありそうだった。

「近くから撃ったら、人間でも殺せるほどのパチンコや。それで撃つたれ。動物っちゅうのは、自分より強いやつとはケンカをしよれへん」

どこで、こんなものを手に入れて来たのか、いくら訊^きいても、父はただ笑うだけで教えてくれなかった。パチンコのゴムを引いて、その威力を確かめているぼくに、父は脅すように言った。

「車の部品を盗まれるのは、昼間よりも夜のほうが危ない。お前、暑いのがいややった